

## ぴっと・いん



### ★女性に人気バツグン

ビザバー・イタリアコ

さんちかタウン・サロン  
タウンに瀟洒なビザバー  
「イタリアコ」がある。

ビザの味は抜群



昭和50年秋オープン以来  
若い女性に圧倒的な人気  
あり、店の雰囲気やメニ  
ューにもファッショナブルな  
女性志向が伺える。

ビザはサラダ付きで10種  
類あるが(500〜530  
円)、オリジナルのミック  
スビザが人気の的。他にも  
スパゲッティ・パスタ、グ  
ラタンなど手頃な値段でイ  
タリア料理が味わえる。

「食事もファッション。た  
だ食べるだけではなく、お

しやべりをしたり、憩いの  
場として利用して欲しい」  
と佐々木店長。お客さまと  
店を結ぶ「Q&Aノート」も  
なかなか楽しくて、好評だ。

ビザバー・イタリアコ 電話391  
5069 10:00AM〜9:30P  
M 第2・3水曜日休み

### ★思いがけない店

「フロン」

フランスのグラフィック  
デザイナー「フロロン」が  
大好きな安川一郎さんが、  
コーヒーとスナックの店、  
「Florent」をオープン。

若い安川夫妻が、張り切  
っているこの店は、三宮を離  
れて入江小学校と入江公園



フロロンの若い安川さん夫妻

のそばにある。思いがけな  
いフランス風のゴージャス

なインテリアと、ゆったり

とした雰囲気のおかげで、コ  
ーヒーや軽食が楽しめる。

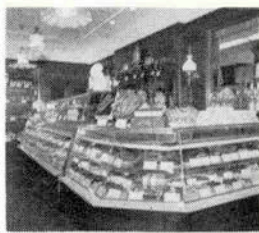
何といっても値段が手軽  
で空オケやTVの設備もO  
K、一人でカウターも良  
いし女性連れ、グループや  
商談にも向くソファアーの  
コーナーもある。安川夫妻と

のおしゃべりもまた楽しい  
フロロン 兵衛区西出町2丁目5  
8番52 2077 9AM  
10:30PM  
コーヒードリンク 500円  
グーデ食 500円 オールドキープ 450円

### ★アンテナノールの味を

お教えします

開店以来3ヶ月、美味し  
さで人気どんどん上昇中の  
「アンテナノール」のシエフ



アンテナノールの味の秘密を公開!

山川さんが5月14日、お菓  
子教室を開催。洋梨を使っ  
たデザートと秘訣を公開、  
お菓子の本には書かれてい  
ないちよつとしたコツを教  
えてくれた。

今後もご要望によって開  
いていくつもりなので、お  
菓子好きの方はご連絡を。

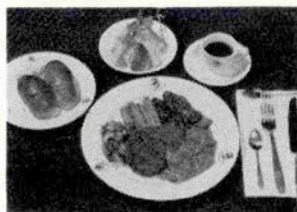
アンテナノール 中山手1丁目ヒル  
サイドテラス1F 電話2421-37  
97 毎火曜休み

## ●神戸うまいもん とドリンキング

レストラン

セントジョージジャパン  
生田区北野町1丁目130  
電話2421-1234

北野町の高級会員制レ  
스토랑、セントジョー  
ジジャパンが昼間も営業  
ランチメニューができた  
昼間(11AM〜4PM)は  
会員以外の人も利用でき  
るので、北野町散策やシ  
ョッピングの帰りに立ち  
寄れる。



豪華な特製ランチ

北野町の魅力は夜景も  
だが、庭の広いセントジ  
ョージの昼間はとても素  
敵。街の景色を見降ろし  
ながら庭の緑を見ながら  
セントジョージのシエフ  
自慢の味を、優雅に楽し  
めるので文句なし。その  
上値段も、文句なし。

特製ランチ (パン・サラダ・コ  
ーヒー付) 1000円 Aランチ  
2000円 Bランチ3000円  
その他アラカルトメニュー

# 夢の消滅

6

大原 由記子 え・南 和好

一央は一枚の幸福な絵を見るように実桜と冴子を覗めた。冬の薄い日の光がブラインド越しに二人の女の裸体に縞をつけている。女の産毛を光はこそばしている。

「私たちどうしてればいいの」

「好きなように」

一央は膚色の絵具に銀色と白をまぜながら言う。

冴子は実桜の体をまさぐりながら、ちらりと一央を盗み見る。ふふつと鼻にかける笑い声が一央の耳に残る。冴子の手がスローモーションの画像のように、実桜の肉のついてない体をはう。間伸びしたような夏の午後のように時はゆっくりと流れていた。実桜の手が冴子の背中に回る。冴子の膚の感触、咄嗟に一央のなかに一つの感触をよみがえらせ、息苦しくする。冴子の体の匂い。絵筆を機械的に動かす。もしたろけるような感情を押し殺しているものがあるとすれば、それは冴子の瞳、火照っている体の熱さからほど遠い冷たく輝やく瞳、過去の一点だけを見抜いてるような目差しが、冷静さを一央に強いる。そしてあの瞳の輝きは一央にも共通している。同じ暗さと欲望を欲していることを一央は知っている。

「早く仕上げてこっちへいらっしやいよ」

冴子は実桜の髪の間から顔を出す。

「そんなに簡単には描き上がらないよ」

実桜は冴子の胸に顔をうずめ、眠むような目で一央を見つめている。甘い蜜を嘗めて満腹した子供のように、うつろな視線で一央の筆の動きを追っている。一央はこそばゆいような目差しを手に感じる。目には見えぬ蜘蛛の糸のように、実桜の視線がねっちょりと一央に絡まる、早くおいでよと。

「ああ、わかったよ」

一央はTシャツを脱ぎすてるとベッドにとびのった。

「油っぽいのね」

実桜は一央の首に絡まってくる。

「危ないよ」

一央と実桜は絡まったまま冴子の上に倒れる。

何か温かな感触がおかしくてぶつかった痛みは消え、笑いが三人を包んでいた。実桜は冴子の腹の上で、冴子は一央の腰の上でしばらく笑いをかみしめていた。

冬の午後は短かくほんのつかの間の明るさしか保養しないのに、その日に限ってたりとした明るさとあたたかみを夕方近くまで固持していた。

「インディアンサマーって言うんだよね、こんな日のこと」

一央はぼつりと言った。





牙子は眠りはじめた一央に寄り添い煙草をくゆらせていた。煙草が欲しい訳でもなかったが、もこもこ広がる煙の軽やかさを羨望の目で見ていた。実桜が寝付いてからずっと牙子を膚にしている実桜への執着が重く牙子にのしかかっていったから、煙の自由な広がりをうらやましくも味けなくも思えていた。

実桜の体を薄く包んでいた香りが熱のために甘酢っぱく感じられてから、実桜の体はますます植物の匂いを発しながら牙子を惹きつけていた。萎えていく生命を間近かで見るという楽しみは悪に近いからこそ、想像以上のよろこびと悲しみをはこんでくる。

「まだ眠れないのか」

一央はだるそうな声で寝返りをうつ。

「病人のMを一人にできたのが気になるんだろう」

「それはあなたじゃないの」

一央はシャツをはおって起き上がる素振りをしたが、牙子はそれを止めた。起き上がりスタンドの灯でもつけられたらたまらなく思えた。

「そんなにMが大切なら、どうしていつしよにいてやらない」

「長くいつしよにいられないのよ。Mを殺しかねないわ」

「眠気もふつとびそうな迫力じゃないか」

一央は牙子の手を払ってスタンドの灯をつけた。

「ぼくはあなたたちがどんなに深い結びつきなのかほとんど知らないし、知ろうとも思わない。ただあなたたちを見続けることがぼくのスタイルだから崩そうとも思わない。卑怯だと言われても仕方ないさ」

一央はいも虫のようにくるまっぴ煙だけ吐いている。

「わかってるわよ」

「だからぼくに泣き事を言うのはよせ。Mを傷つけることがあなたの愛だと言うのなら、そうするがいいさ。あなたたちのゲームに立ち入るつもりはない。しかしもしぼくに必要なことがあれば手伝ってあげてもいい。それはぼくの愛情であり、あなたたちへの復讐でもある」

「Mを連れ去って欲しいわ」

「いいだろう。簡単なことだ」

一央は灯を消して毛布にもぐり込んだ。また闇が広がり牙子の煙だけが白く浮いた。一央は背を向けると寝たふりをはじめた。牙子はがっしりした背中に抱きつきもう一度抱かれたかった。不思議なくらい牙子の体には一央の感触が残っていなかった。膚を寄せれば寄せるほど遠のいていくもどかしさが手の中にあつた。

牙子は不満気にシガレットケースに手を伸ばした。もうしばらくすると一央のかすかな寝息さえ聞こえそうなきがした。しかしすぐには一央が眠らないことはあきらかだった。牙子の気分がほぐれない以上一央にも何らかのしこりが残り、一央の不機嫌さが又牙子の眠りを脅かしていた。不機嫌な感情を共有するとき二人が一番近い距離にいることも確かだった。体の重なり以上の身近かな位置で不消化な愛を噛みくだいていた。

「あなたは決して誰も愛せないわよ」

「あなただって人のことは言えないさ」

一央の声は眠気を帯びていつも以上に低く響いていた「でも私はゲームのくりかえしで本物になっていく感情を見いだせるわ。言葉が気分を作っていく。虚構だって本物になることもあるのよ」

「多分あなたの言う通りだろう。しかしぼくはあなたがゲームを始めたから、それにのつた。Mにも興味を持った。しかしMとてもあなたという存在がなかったら惹かれやしない。今だってあなたたちを見る分は楽しいさ。しかしぼくはSやMとしてあなたたちを見るつもりはない。まして牙子は牙子、ぼくからしたらいつも生身の女だ。だからあなたたちの愛が本物になろうとぼくとは関係ない。あなたへのぼくの気持は変わらない。それがぼくの告白だ」

牙子は黙って煙を吐いた。一央はいつも曖昧な畏をかけてくる。不明瞭さに気持をすくわれて一央のなかにこるびそうになる。

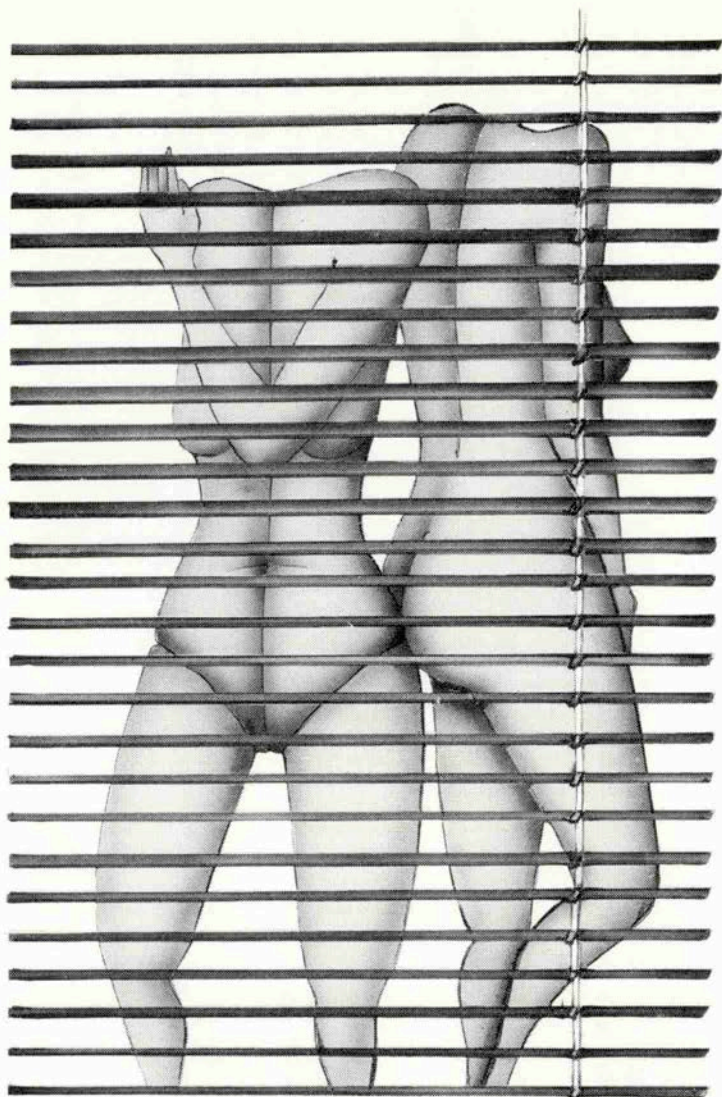
「あなたといっしょに生きることはできても、死ぬことはできないわ」

「それで十分さ」

一央はうつらうつらとした眠りの海に徐々に体がつかりはじめているのを感じた。冴子の体の匂いが軽い痛みのように皮膚の表面に残っていた。どんな言葉で撫でようと痛みは消えそうもなかった。そんな痛みを抱いて眠らなくてはいけない自分がなさけなかった。しかし冴子の匂いを忘れるには、二人の曖昧な関係は長すぎた。その間に冴子はあらゆる手段で一央の感情を刺激し飽きる

ということさせない女だった。そしてその度に一央は少しづつ年をとっていった。目は光に疎くなり皮膚はいきいきした感触よりも人工的な手触りを求め、彼の若さは老化することのみに情熱をそそいだ。

冴子の寝息が聞こえていた。感情をぶつけるとキャッチボールに飽きた子供のようにぐったりと眠る冴子を見るととき、一央は安らぎと疲労感をいっしょに感じた。そしてどこまでもただよう暗い眠りの海でぶかぶかと浮いている自分たちの姿を想像した。一人は冴子であることは確かだった。しかし冴子と重なり合って波間をただよっているのは一央ではなく実桜のようだった。もしこの



1997.10.10

広い海から一人しか救えないものとしたら……。

一央は呪文のように唱えながら眠りへと落ちこんでいった。今冴子と眠りを共有すること以外はすべて闇の底に沈んでいた。

実桜はぶるんと身震いしてベッドにもぐり込んだ。熱っぽいだるさが身体の奥から醗酵し、甘くすっぱいような悪寒が連続してやってくる。——これを飲んだら少しは楽になるはずよ——

冴子の粉薬を一央が作ったほうれん草のボタージュスーブに流し込む。グリーンの液体に薬は同化せず、ガラスの破片のように表面できらきら輝いている。

実桜はスプーンで乱暴にかき回して抄った。薬なのかほうれん草なのか、苦味がちくちくと舌に絡まる。苦味が少し甘く感じられるのは、でき上がる前に一央が生クリームをたらすことを忘れなかったのだろう。しかし三口目を口にしたとき激しく咳込んでスプーンをおとしてしまった。ベッドからカーペットへたたりとグリーンの染みがついた。

「どうしたんだ」

一央が白いサロンエプロンをして立っていた。

実桜はおかしさがこみ上がってきた。

「似合うじゃない」

「病人らしく大人しくしてたらどうだ。憎まれ口をきかずに」

一央は冴子のネグリジェに着がえさせ、濡れた実桜のベッドから冴子のベッドまで実桜を抱いて運んだ。

「この部屋によく入るの」

実桜はきよきよと黒い空間を見回した。

「まあね」

一央は意味もなく笑った。

「さっきあなたがまだ眠っているときだが、窓の外で男の子がうろうろしてたよ。あなたの知り合いじゃないかな」

「どんな人」

「ぼくと同じくらい背の高さ、同じような肉付き」

「それに感じがあなたと似てたんじゃない」

「それは自分ではわからないが、あなたと何か関係がある男だとすぐわかった」

「私たち手一つ握ったことないのよ。Sの恋人よ。私たちははるか昔の知り合いにすぎないのよ。もうはつきり思い出せないくらい昔の」

「そんな男がこんな山奥まであなたを捜しにくるのかい。まるであなたは魔女だな。はるか昔の人間までたぐりよせるのだから」

「彼がSの恋人だと言ってもあなたは嫉妬しないの」

「はるか昔のことなのだろう」

「今も続いているわ」

「あなたたちといっしょにしていると大抵のことは驚かなくなる。そんなこともあるだろうってね」

「じゃあ、Sと私ではどちらが好き」

「わからないよ。あなたたちはまったく異質の個性を持った一卵性双生児みたいな関係だから、ぼくには区別がつかないときがある。もっともあなたたちにすれば、ぼくの存在なんか空気のようなもので互いの愛を認め観察する目を持った男なら、ぼくでなくても誰でもよかったかもしれない。きつと窓の外にいた男はぼくの役がでなかったのさ。あなたたちのどちらかを本気で愛してしまった。ゲームがゲームでなくなった。そうじゃないの」

「よくお見透しね」

「眠った方がいいよ」

一央は毛布を実桜の肩までかけた。

「実桜、ぼくは窓の外であなたを見た男ほどやさしくも冴子ほど冷たくできない男だよ」

「実桜って呼ばれたのはじめてね」

実桜はふふっと笑って毛布をすっぽりかぶった。

(つつく)



## ●神戸っ子トラベルコーナー

★7月カナダ冒険学校13日間

この夏、自然に生きる、大自然の中、カナディアンロッキーのふもとカナダ・カルガリー、YMC Aの広大なヤマナスカキャンプグラウンドで自然のすべてを体でおぼえよう。

日程／7月25日～8月6日  
費用／¥338,000(12才未満) ¥358,000(12才以上)

大阪→成田→バンクーバー→カルガリー→ヤマナスカセンター→オカナガンレイク→バンクーバー→成田→大阪  
お問合せ・お申込は阪急交通社三宮営業所 331-3355

★ブリティッシュ・コロンビア大学夏期カナダ・ホームステイ50日  
日程／7月14日～8月29日  
費用／¥485,000

いろんなオプショナルツアーもありです。食事付。

★ハワイツアー4日間

出発日／毎日出発(日、月除く、6月末まで)  
費用／¥138,000



ポリネシアンダンス

お問合せ・お申込みはトップナッチ(井倉区琴緒町5の7の1グリインシャポール2階)  
242-2695

★カイロとヨーロッパ15日間

話題のアテネ、カイロを中心にローマ、パリなど代表的な2都市をプラス。とくに崩壊の危機にあるギゼーのピラミッドがハイライト

日程／7月17日～31日、7月24日～8月7日、8月7日～21日  
費用／¥398,000(7月17日出発) ¥458,000(7月7日出発)

24日、8月7日出発)

お問合せ・お申込みは日本旅行三宮営業所 241-1881

★セブ島・マニラ4日間(A)

遠浅の海、白い砂浜、時をわすれてしまいたいようなセブ島へ……。  
日程／7月30日～8月4日  
9月20日～9月23日  
費用／¥98,000



マニラ湾の夕陽

★マニラ4日間(B)

世界最高といわれるマニラ湾の夕陽をながめながら……。  
日程／Aコースと同じ  
費用／¥73,500

A、Bともにタガイタイとナヨンファイビノ観光(¥8,000)

モンテンルバ観光とバグサンハンの川下り(¥9,000)のオプショナルツアー付

お問合せ・お申込みは瀬神戸生活協同組合観光部(東灘区住吉町中島434-1) 851-7001

★クルーザーでまわる未知の国スーダン、イエメン、南イエメン

ヨルダンとエジプトの旅今年度末に紅海での珍しいクルーズを企画。船はエビロティキラインのネブチオンを予定。普通のツアーでは入国不可能な国々を訪れますので大変な魅力です。

大阪→カイロ→スエズ→ポートスーダン→アデン→ホデйда→アカバ→サファガ→アスワン→カイロ→大阪

お問合せ・お申込みはドッドウェルトラベルサービス(井倉区磯上通明治生命ビル)

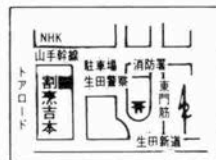
251-0021

この度、移転致しました!!民芸的な雰囲気の中で、日本料理の逸品を…



本吉志刺

●昼間は京風弁当もあります  
午前11時30分～午後10時 第3日曜のみ定休  
生田警察署西口前  
☎331-5817, 392-2020



# 自由と正義の水たまり

最終回

蒼 竜 一

え・小西 保文

ソフィは<sup>お</sup>尔の手をとったまま、白い顎で夫と子供の方を示し、

「仲が良いのよ」と彼らの方へ、尔を誘った。

子供は、側に居る血の繋がった父親には目もくれず、盛んに金魚を追い廻していた。ちっちゃな手がガラス壁を敲くと、その掌よりも大きい赤い蘭虫や琉金が、蝶のように舞いあがる。尔は、放心したようにその光景を見詰めていた。ふと見せた敏捷そうな黒い瞳に黒い髪。尔はその子を抱きあげたい衝動を覚えたが、すぐそうしてよいものかどうか躊躇してしまふ。

「あなた、ここではゆっくり話も出来ないから、静かな処へ行きましょう」

ソフィの言葉に、男が子供を抱きあげ、みんなは地下の茶房へ下りて行つた。尔は最後を歩きながら、いよいよ話が本題に入るだろうと云う緊張感を覚えた。

ソフィと尔が並んで座り、向いあつて彼女の夫と子供が座つた。と言つても、彼女の夫が席を勧めてくれなかったら、尔は誰と並んで座ればよいのか、恐らく決めかねていたのであろう。

「坊や、名前は何って言つたっけ」

尔の物言いは、何処となくぎこちなかった。

「ジョウジ」

子供は黒い瞳を更に大きく見開いて、彼を見詰めた。

彼は目を逸せた。

尔は日本語でなら、讀二とか城治とか字をあてればよいと思ひ、やはり何処かに彼自身の幼い頃の面影を見るような気がしながらも、この日本語を全く解せぬ子を前に、どうしてもためらい勝ちになつてしまふ。

尔は向い合つて座るソフィの夫に、何か改まつて言わねばなるまいと思つた。飯え、少しの沈黙にも、この男の前では辛抱出来そうになかつた。

「実は、ソフィいやあなたの奥さんから既に聞いているかも知れないけれど、私と彼女とは暫く一緒に暮らしていた。もちろん私は、真剣に彼女を愛していたし、結婚するつもりでいた。信じて欲しい。決して彼女を玩ぶとか、そんなつもりは全然なかつた……」

男は真剣な顔になつた。すると悪意のある表情ではないが、少し恐い顔付きになつた。

「もう何も言わなくて好い。そんな事はこれからも決して言う必要はない」

尔は惨めな自分を感じ、再びシュガーポットや灰皿を触り始めた吾が児を見た。多少落ち着きに欠けるが、いじけた処がない。

「成程、この子はお前の子だ。しかし法律的には私の子だ。一人前になる迄は、私達にその扶養義務がある。もしこの子が成人して、その時日本の国に住みたいと思





うなことを言う。

ソフィは大仰に驚いて見せ、あなた方はまるで昔からの親友みたいだと言いい、さらに私は大変幸せだと繰り返した。

尔はこの時、この男は全く自分とは人間が違う、そしてソフィはそれを知っていたのだと思った。

尔は急に深い疲れを覚えた。

ソフィが尔に、彼の家族、妻と子供のこと

を訊ね、連れて来れば良かったのと言った。

彼女の夫は尔に、仕事について訊ね、尔が明日の観光案内の約束をして、後は総ゆる方面に話題が及んだ。

男は、ソフィに会う前、空軍に居たと話した。そこを辞めた経緯は、仲の良かった同僚の一人が、練習飛行中ジェット機もろとも海に墜落して死ぬと云う事故があった。その時、司令室に居た男は、友達の(アイキッド!)と云う最後の絶叫を聴いた。それきり応答はなかった。その一言が耳を離れなくて、彼は軍を退き故郷のオレゴン州に帰った。そこで、夏休暇で帰省していたソフィと会ったのだと言う。

尔はその時、ソフィの腹に自分の子が居ることを承知

えば日本に住めばよいし、アメリカに住むつもりならばアメリカに住めばよい。それはこの子の人間としての自由だ。その時に本人が決めればよいことなのだ。今も言ったように、この子は現在、私の子だ」

尔は、自分の煮え切らぬ態度が、どうやらこの男に誤解を与えてしまったらしいと考えながら、

「あなたの言うことは間違っていない。まさにその通りだと思う」

尔の言葉にすぐ笑顔を取り戻した男は、砕けた調子になつて

「お前はソフィとの間に子供を作った。俺も負けずに頑張つて子供を作るからな」と、まるで野菜でも作るよ

で結婚したのかどうか尋ねてみたい欲求を心のどこかに抱きながら、同時にこの男の前にそんな自分を酷く恥じていたのだった。それに、もうどうでもよい事であった。

話が途切れた時、ソフィの夫が、冗談を言っているとは思われない顔で言った。

「今夜ホテルに泊って行かないか。もちろん一度帰って、夜出直して来ておかまわない。私は一晩位息子と別の部屋をとつてもよいし、妻もあなたに会うことを本当に楽しみにしていたものだから」

尔はその言葉の意味が一瞬呑み込めず、男の顔をまじまじと見詰めていた。

その間の抜けた尔の顔をソフィが受け取り、微笑しながら

「駄目よ。チカは儒教の精神だから」。それに彼の奥さん嫉妬深いかも知れないしね」

「からかわないで下さいよ」

男の頬に笑窪が出来かかり、出来ずに消えた。みずいろの深い瞳の底に、尔は自分の顔が映っているような気がした。その顔がとても嫌な感じだった。

男は時計を見ながら

「それじゃ、もう余り時間がないから明日また会うことにしてはどうかね。私達は午後の定期観光バスに乗ることになっているから」

その言葉に、ソフィが子供を目で捜している。子供は茶房の中を走り廻っていたが、今は絨毯の上を這ってテーブルの下に潜り込んで居る。

「勇敢な男だ。彼は何物にも負けない立派な男に育ってくれるだろう」

男の頬にまた笑窪が浮かんでいる。尔はその横顔が、ちょっと寂し気に見え、なぜかしら男が自分は友達の最後の叫びに負けた臆病な男だと語っているような気がして、胸に熱いものを覚えた。尔はこの男を凄く好きになり、その分だけ自分を惨めに感じた。この男なら仮え人種は違っても、少くとも食い物のことで女と諍いをする

ようなことはなかったらうと思えたからである。

尔はふと子供にやるために買っておいたレコードを忘れて来たことに気付いた。

「プレゼントのレコードを家に置いて来てしまったので、明日持ってくる」

尔は腰を伸ばしながら言った。男が子供を連れに行き、ソフィが席を立つのに合わせて。

「あら、あなた私の趣味まで憶えていて下さったのね、嬉しいわ。私今も彼と同じようにあなたを愛しててよ」

ソフィはまた尔の手をとった。ふっくらとして柔かい掌、それは尔にかつての白い顎の感触を想起させるに充分だった。

それを振り払うように

「いや子供のき、童謡なんだ」と、これは言わない方が良かったかと思ひながら、

「トンボの目が水色なのは、青い空を翔んだからと云う、有名な日本の童謡なんだ」

尔は、照れ隠しのようにクロス貼りの天井を見上げた。彼女はあなたへではなく子供への贈物だと言われても別に服れもしないで

「すてきね。でも、ジョウジの眼は、あなたのように黒色だよ」

尔はその言葉に、ぎよつとした。

子供を抱いて側に来ていたソフィの夫が、笑いながら「何を吃驚しているんだね。それは至極自然なことではないか」

ソフィも夫の笑いに合わせ声を立てて、三人と子供は茶房を出たが、尔だけは笑えなかった。

ホテルの正面玄関に着いている観光バスに彼等を見送った尔は、そのまま家と云うには気の引ける文化住宅に帰ることにした。

道々、桜の花びらが、かそかな風に散っていた。

尔は歩きながら、あの男のように自由でありたい、人間としてもっと自然に人生を眺められたらどんなにいい

だろう、と思った。同時に、あの男のように見事に、所謂自然に生きることが出来ない限り、所詮自分は侮辱やら憎しみやらの、その他いっぱいの不自然な感情を抱き続けて、この世を渡って行くしかないのだとも思った。

辛抱したり（ほとんどの場合がそうであるが）、時には静いをしたりしながら、泥にまみれてしこしこやって行くしか仕方がない。それが一等似合った脚が地に着いたばかり自身の生き方（これまで一度だってこれ

でよいのだとは思ったことのない）人生なのだと、尔は思った。

更には今の生活を大切にしたいとさえ殊勝にもこの洋行帰りの若者は、考えていたのである。なまじつかな厳しさとか云う感傷のもとに、現在の生活を破壊することなど、鼻をかむよりも容易いことのように思える。尔はソフイに心魅かれ、その感情は極く自然なものであったが、なんとか妻と仲なおりしてやって行くこ



とを第一義に、部屋に帰って来たのである。旅行代理店のあの社長さんが、今しがた目撃した事実を、誇張して妻に語るに相違ないと推測しながら――。

部屋は一時の他出にしては、妙な具合に片付き過ぎていた。何かメモでもないかと捜したが、それも見当らなかった。

今度だけはちよつと厄介なことになるかも知れないと思い、尔は部屋にごろ寝して暫くぼんやりしていた。生きて行くには一日は余りにも様々な事が有り過ぎる。まだ昼下りなのかと、尔は思った。

乳臭い赤児の匂いの残っている部屋が、妙に薄ら寒いのに気付いた尔は、立ち上ると、部屋の隅にある机の前に座った。そこには安物のプレーヤーが置いてあり、その脇にドーナツ盤のレコードが二枚。彼は便箋を取り出し、この童謡の英訳を贈物に付けるつもりでペンを執った。ところが高ぶった彼の神経が、当初考えもしなかった文面を彼に書き始めていた。



どうか、あなたの子供が、物心ついて、彼自身の髪や瞳の色から、私のことを尋ねる日がやって来たら、その時、私のことを臆病な唾棄すべき男であったと、そして今はもうこの世には居ないのであると、きつと話してやって頂きたいのです。

ここまで書いた尔は、ふとベンを投げ出すと、頭を抱えて凝然としていた。それから顔をあげ、俺は何をしているんだろうと口に出して言い、こんな事（それは義父のもとでの子供の生活を完璧にしたいと願う実の父のずいぶん浪花節的な行為ではあったが）をする必要も権利もなかったんだと、尔は思った。

あの男の言ったように、成人した時あの子がアメリカでソフィ達と暮すのも、日本に来て住むのも、それは将来あの子自身が決めればいい、あの子の自由だ。但し、将来あの子が日本に来て、尔自身によって拒絶されるような事だけは、そんな三文小説のお涙ちょうだいみたいな事だけは決してあってはならないのだと、尔は思った。それがあの男の云う至極自然なことであろう。そのうえ、ジョウジは現在あの男とソフィの子供なのだった。

尔にとつて自然とか、自由と云うものは、本当に寂しく芯の疲れるものであった。尔は書いたばかりの便箋を破り捨て、さらにレコードの包装紙を破いて一枚を取り出すと、プレーヤーに載せた。レコードに描かれた二匹のトンボが、ゆっくり回転盤の上を廻り始め、すぐ見えなくなった。

尔は煙草に火をつける。

自分の子ではないあの子が、オレゴン州の広い空の下で、この曲を聞くのだ。

視線が山に阻まれることのない国、何処迄も黄色い草原の続く広大な土地で、ジョウジは自由に生き続けるだろう。そこにも季節が来たらトンボが空を翔ぶだろう。乾いた草の中の道を歩いた思い出。目ばかり大きい、何かを見てしまったトンボ。

嗚呼、トンボの目から涙が落ちる。

（あなたの心は、ナイテ居ルノネ）

廊下ですれ違った髪の長い大柄な女子学生が、たどたどしい日本語で、話しかけてきた。日本語講座の教室に手伝いに行った時、強く印象に残ったノウ・スリープの白い腕が、抜けるように美しい女である。

暑い夏。希望と崩壊が同時に襲って来てもちっとも不思議でないような四年前の、あの暑い夏。凡てはそこから始まっていた。いま日本から届いたばかりの父の死を告げる電報を、掌にしっかり握りつぶしたまま、もうこれからは、何をやっても誰も悲しんでくれる者が居なくなつたのだ、と思った。

明るく広い大学の廊下を、ソフィと名のつた女と肩を並べて歩きながら。

（華）

#### □蒼 竜一（作家）



きょしな感じで、人あたりが好く、神戸でも女性に人気がある。そのせいかどうか、最近、東大寺学園を辞め、奈良文化女子短期大学に勤務を変えた。連載小説「自由と正義の水たまり」は、本人の体験を下敷きにフイクションの形でものにした一篇だが、「お前は、小説よりも体験の方が面白い」といわれるほど、ちょっと常人には真似のできない体験が豊富だ。7月号からは岡氏によるルポルタージュ「知らない人の神戸」（仮題）が始まる。永年、奈良の地に居住し、いわば「異邦人」の眼で見た神戸が、どう料理されるか、大いに楽しみだし、期待される。

#### □小西 保文（二紀会会員）



素外で人間味のあるさし絵を描く小西さんは昨年三月に金山平三賞を受賞し、その受賞記念に「人間愛の造型」というタイトルで今年、三月五日から十八日まで東京の光悦洞、四月六日から十一日まででは仙台の藤崎デパート美術画廊で個展を開催した。見るからに暖かみの感じられる庶民的な人柄で、神戸二紀会の中でも信望が厚い。人間の存在を深く問いつめること——をテーマに描き続け、現在は秋の二紀展にむけて構想を模索中。毎朝、裏山に二時間は登山し、ラジオ体操をして体力作りに励んでいる。本誌主催第三回ブルームール賞受賞。兵庫県在住。